

生活、交通環境調査から見た都市住民の意識構造について

秋田大学 学生員 京野秀朗
 秋田大学 学生員 大友由利夫
 秋田大学 学生員 〇小松順一

1 はじめに

現在、我が国において、環境破壊、交通公害及び日照権等の社会問題と無視出来ない実状は、都市諸施設に対する計画の重要性を示唆しているから、従来の土本計画に対する都市住民のさびしい批判を意味するものである。それは都市計画及び地域開発計画が住民の意識を無視して

表-1 アンケート回収結果

	大館市	鹿角市	男鹿市	能代市
総人口	71,800	46,606	39,459	59,946
回収枚数	710	457	713	653
使用枚数	430	235	235	305
	本荘市	大曲市	横手市	湯沢市
総人口	40,967	40,861	43,042	38,034
回収枚数	676	688	406	486
使用枚数	245	245	260	230

策定できないことと如実に示されている。特に生活、交通環境という都市住民の身近な問題から土本計画を策定する場合に、まず第一に、都市住民にとって利用のしやすさという観点から、考えるべきであろう。人間が集団生活を営み、よりよい社会生活ができるようにすることは、都市計画及び地域計画の目標であり、そのための人間活動の場としての都市形態のあり方に関する追求が必要とされる。そのためには各種土木事業の計画及び都市諸施設等に対する人間の生活満足度という心理的側面を捉え、住民の意識構造を把握しておくなければならない。上述のような問題認識に基づき、秋田県八市(秋田市を除く)について、全人口の1%を対象として、生活、交通環境についてアンケート調査を実施した。前アンケート回収結果については、表-1に示した。本調査の目的は、都市住民が自ずから都市をいかに意識し生活しているか、といった基礎資料をアンケート調査から得て、その結果を定量的、定性的に解析することにある。そのために従来の方法のように個別の都市についてデータを取得するのではなく、秋田県八市を対象として行なった。それは都市規模による都市住民の意識構造の変異が各都市の都市機能との関連において分析できると考えられたからである。さらに調査結果から、生活環境を総合的に評価する方法を提案した。

2 生活環境調査における単純集計結果

満足度が50%以上を占める項目は、“空気のきれいさ”、“日当り”、“風通し”といったような自然環境に限られている。一方、不満足度が50%以上を占める項目は都市住民にとってごく身近な要因があげられる。つまり、“子供の遊び場所の豊富さ”、“子供の遊び場所の安全さ”、“日常買物店の価格”、“まわりの道路の安全さ”、“まわりの道路の街灯の明るさ”、“雪捨て場所の有無”等である。以上のように満足度が高い項目に比して、不満足度の高い項目はきわめて多い。しかしながら全体としての不満足度は低い。また、都市諸施設に関しては各都市間の差異が顕著である。全体としての満足度をみると、各都市とも、“満足”と“普通”を合わせると約80%で、大半が現在の都市生活環境に満足している。しかし、文教施設、スポーツ施設、福祉施設等の個々についてはかなりの不満を感じているようである。換言すれば、都市諸施設等の個々に対し不満を感じながらも生活を維持できるミニマムの生活環境条件は満たされているといえよう。

2-1 定量的分析結果

定量的分析法として、数量化理論第Ⅱ類と主成分分析法、及び回帰分析法を用いた。その結果の一部を表-2、表-3、表-5に示す。尚、表-2の()内の数字はレンジを、表-3のそれは因子負荷量を示す。

表-2 数量化理論第Ⅱ類計算結果

数量化理論第Ⅱ類によると、“河川のきれいさ”、“まわりの静けさ”といった自然環境を示す要因、“公民館などの公共施設”、“病院などの医療施設”、“学校などの教育施設”といった都市諸施設を示す要因のレンジが大きく、これらに対する市民の意識

鹿角市	湯沢市
公民館などの公共施設 (0.505)	まわりの静けさ (0.374)
河川のきれいさ (0.356)	まわりの道路の舗装状態 (0.357)
幼稚園、保育所などの児童施設 (0.323)	上道(国県道)の整備状態 (0.353)
病院などの医療施設 (0.311)	学校などの教育施設 (0.331)
空気のきれいさ (0.310)	河川のきれいさ (0.316)

の高いことを示している。また能代市で“家のたてこみ具合”、男鹿市で“プライバシーの保持”、という要因のレンジが大きいことが注目される。主成分分析法によると、第1成分は都市諸施設の整備、第2成分は自然環境のよさ、第3成分はコミュニティという意味づけができる。また第1成分の説明力が約20%、第3成分までの累加説明力は約40%と低い。説明力を増加させるため今後各指標Kについての検討が必要であろう。尚、各都市内の地域特性Kについての検討も必要であろう。

表-3 主成分分析法計算結果

大館市		
第1成分	第2成分	第3成分
体育館、グラウンドなどの運動施設 (0.585)	風通し (0.633)	近所ののりよさ (0.616)
図書館などの文化施設 (0.563)	日当り (0.606)	雑居所とのつき合い (0.589)
学校などの教育施設 (0.560)	風のさびしさ (0.572)	緑の遊み場の豊富さ (-0.466)
公民館などの公共施設 (0.550)	家のたてこみ具合 (0.553)	緑の遊み場の安全さ (-0.396)
公園の充実度 (0.508)	おりの静けさ (0.549)	プライバシーの保持 (0.375)

都市機能を表現すると思われる変量を表-4 K、不満度との相関を表-5 K示した。表-5の値は相関係数である。

表-4

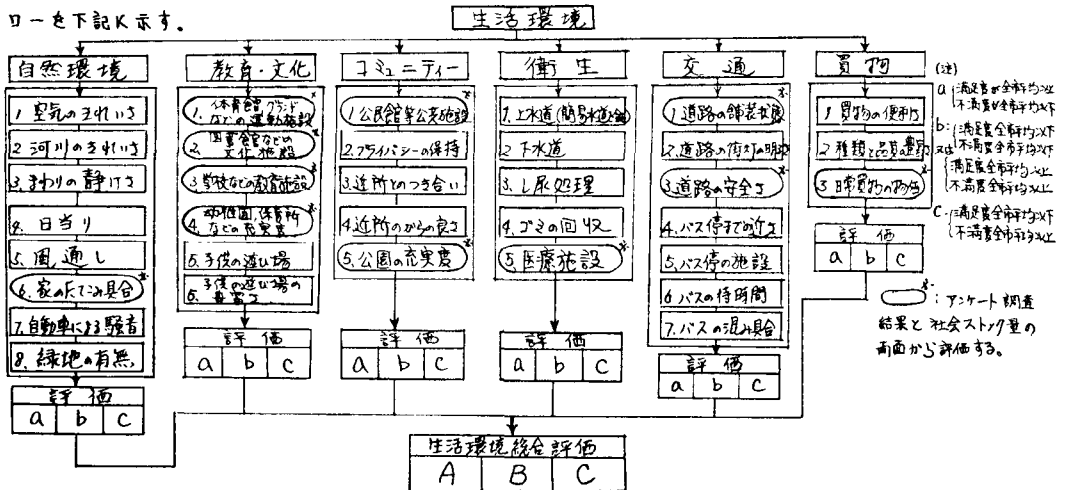
記号	変量名	内容	単位	記号	変量名	内容	単位
X ₀₁	人口密度	総人口/総面積	人/ha	X ₀₇	医師1人当り人口	総人口/総医師数	人
X ₀₂	中間地人口密度	総人口/平地面積	人/ha	X ₀₈	ベント普及率	総ベント数/総人口	%
X ₀₃	物価指数			X ₀₉	社会福祉施設設置率	福祉施設数/総人口	%
X ₀₄	交通事故発生件数	事故発生件数/総人口	件/1000	X ₁₀	保育所普及率	保育所数/総人口	%
X ₀₅	道路舗装率	舗装道路延長/道路延長	%	X ₁₁	木立普及率	総木立人口/総人口	%
X ₀₆	人口1人当り公園面積	総公園面積/総人口	m ²	X ₁₂	小学校児童1人当り児童数	総児童数/総児童数	人

表-5

項目	X ₀₁	X ₀₂	X ₀₃	X ₀₄	X ₀₅	X ₀₆	X ₀₇	X ₀₈	X ₀₉	X ₁₀	X ₁₁	X ₁₂
家のたてこみ具合	0.486	0.702	-0.392	0.325	-0.137	-0.229	-0.428	0.665	0.048	-0.279	0.619	0.629
し尿処理状態	-0.715	-0.638	0.467	0.123	0.088	0.808	0.293	-0.054	0.407	0.727	-0.668	-0.642
公民館等の公共施設	-0.393	-0.388	0.363	-0.181	-0.418	-0.138	0.361	-0.650	-0.527	0.233	-0.588	-0.261
図書館等の文化施設	-0.243	-0.53	0.215	-0.658	-0.389	-0.442	0.339	-0.823	-0.400	-0.279	-0.201	-0.201
学校等の教育施設	-0.267	-0.153	0.404	-0.248	0.056	-0.411	0.233	-0.561	-0.725	-0.541	0.031	0.020
病院等の医療施設	-0.655	0.119	0.819	-0.642	0.164	0.239	0.933	-0.09	0.466	0.176	0.003	-0.723
買物の便利さ	-0.803	-0.139	0.950	-0.548	0.284	0.236	0.882	-0.626	-0.587	0.067	0.068	-0.300
日常買物店の価格	-0.553	-0.089	0.639	-0.618	0.147	0.003	0.651	-0.728	-0.266	-0.285	0.015	-0.460
公園の充実度	-0.652	-0.392	0.640	-0.350	0.243	0.166	0.642	-0.628	-0.017	0.065	-0.258	-0.423
幼稚園・保育所の充実度	-0.713	-0.127	0.672	-0.136	0.270	0.464	0.056	0.084	-0.432	-0.215	-0.004	-0.350
道路の舗装状態	-0.639	-0.460	0.410	0.331	0.322	0.536	0.400	0.228	0.170	0.322	-0.361	-0.109
全体として	-0.859	-0.071	0.905	-0.278	0.364	0.144	0.558	-0.425	-0.537	-0.181	0.021	-0.269

2-2 生活環境総合評価法

生活環境評価フローは自然環境他5種の項目からそれぞれの評価Kに基づいて総合評価を行なっている。各項目の評価はアンケート調査から得られた全市平均を基準として、A, B, C, の3段階にした。そして得られた各項目の評価K、AKは+、BKは0、CKは-1を代入して、その合計点Kによって生活環境総合評価とした。そのフローを下記K示す。



尚、本研究は秋田大学 清水浩志助教授の指導のもとで行なった。